入門」という科目が開講されてきた。その内容は、カリキュラム改編により少しずつ変化している。教育要項によると、その目的は、平成 4 年度以前は「現代医学の主要なテーマや、医療の実態についての生々したイメージをもち、あわせて救急医療のための初歩的手技を身につけることを通じて、医学生としての自覚を促すこと」、平成5年度より9年まで「基礎医学・臨床医学の諸分野を入門的に紹介し」、平成 10 年より大学病院での「臨床医学を中心とした early exposure」、平成 12 年には、これに患者看護実習が加わった。さらに平成 15 年のカリキュラム改革にともない、医学入門（統合コース）「臨床と基礎を統合した early exposure」となり、平成 17 年度まで実施された。いずれも、大学に入学したばかりの 1 年生が医学に触れ学習意欲を向上させる動機付け、すなわち早期体験学習を目的として行われてきた。

現在の「医学入門」は、座学を少なくし実習・討論を取り入れた学生参加型とすること、さらに「医学入門」全体のストーリー性を重視することに留意して、平成 18 年度より実施されている。その内容は、(1) 体験学習･実習として、マナーの習得、エスコート実習、高齢者・身体障害者体験学習、外来体験実習、患者看護実習、基本的臨床技能実習（医療面接・バイタルサイン・心肺蘇生法）(2) 講義・講演とグループ討論・発表会を組み合わせたもの (3) 従来型の講義　の 3 つのタイプに分かれている。

平成 18 年度から 24 年度までの 7 年間、無記名でアンケート調査を行った。回収率はほぼ 100% である。その結果、(3) 従来型の講義に比べ (2) 講義･討論・発表会を組み合わせの方が興味をもって参加でき、さらに (1) 実習の満足度が高い傾向がみられた。特に「患者看護実習」は 85.5% の学生が満足と答えた。

P3-59.

東京医科大学医学科 5 年生における地域医療実習の現状と学生による評価

（医学教育学）
○菰田　孝行、R. ブルーヘルマンス、泉　　美貴
（医学教育学・北海道大学医学教育推進センター）
大滝　純司
（茨城 : 内科（総合診療科））
柳生　久永
（八王子 : 総合診療科）
青木　昭子、葦沢　龍人
（公衆衛生学）
小田切優子、井上　　茂
（健康増進スポーツ医学）
村瀬　訓生、勝村　俊仁
（社会人大学院 4 年医学教育学）
関　　正康
（社会人大学院 4 年医学教育学）
赤石　　雄

【背景】 文部科学省・厚生労働省「医学教育モデルコアカリキュラム」に「地域医療教育」の項目が盛り込まれたことを契機として、平成 21 年度より、医学科 5 年生の必修として「地域医療実習」が導入された。初年度は 1 日だけの実習であったが、日程と内容を拡充し、平成 24 年度には月曜日から金曜日までの 5 日間の実習を実施している。

【目的】 東京医科大学における地域医療実習に対する学生からの評価を通して現状を明らかにし、その運用の改善をはかる。

【方法】 2013 年 2 月に第 5 学年 BSL 統合講義の時間を利用して、「地域医療実習に関するアンケート」を実施し、のべ 91 名から回答を得た。アンケートは、①「実習先の雰囲気」、②「指導医の指導」、③「実習全体」の 3 項目とし、それぞれへの評価について、「よかった（5 点）」から「よくなかった（1 点）」までの 5 件法で回答を求めた。

さらに、「班別の話し合いで、実習先を決定することの賛否」を尋ね、「改善点」と「感想や意見」について自由記述での回答を求めた。

なお、本調査は BSL の成績に一切関係しない旨をあらかじめ教示し、無記名で実施した。

【結果】 3 項目に対する学生の評価は、①「実習先

の雰囲気」の平均点4.79、②「指導医の指導」の平均点4.77、③「全体の評価」の平均点4.64と、いずれも高い平均点を示した。

また、実習先を班別の学生による話し合いで決定しているが、この決定方法に「反対」する学生が4%、「どちらともいえない」とする学生が18%いた。自由記述から、希望する先で実習できなかった学生が、決定方法への不満をもっていることが明らかになった。

さらに、改善点の意見として、女性限定の実習先（産婦人科）があることへの不満、実習先を自分で見つけたいとの要望などがあった。

【結語】 地域医療実習に対する学生の満足度は高く、順調に実施されていることが示された。今後、定期的に学生アンケートを実施し、要望を考慮しながら、実習内容の充実をはかっていきたい。

P3-60.

平成25年度卒前海外臨床実習前英語勉強会及びオリエンテーションについての報告

（国際医学情報学）
○野田千ゑ里

【背景】 平成25年4月に本学の6年生9名が1か月間の卒前海外臨床実習プログラム2期生として6か所の海外医療機関に派遣される。実習に先立ち事前準備活動として、本年度実習生を対象に英語勉強会とオリエンテーションを国際医学情報学講座所属の報告者が企画した。

【目的】 当該事前準備活動の目的は、実習生の派遣先における医師間コミュニケーションを円滑化することである。

【方法】 当該活動の企画においては、前年度の海外臨床実習生を対象に実施したアンケートとインタビュー調査の結果を参照した。その結果、ニーズが特に高いと思われた論文読解と症例報告に必要な英語学習を焦点とすることで、医師間コミュニケーションの円滑化を図ることとなった。それに加えて、当該活動には海外臨床実習に参加するにあたっての心構えについての意識化も盛り込んだ。事前活動直後および派遣実習後にアンケートとインタビューによる調査を実施する。

【本報告の趣旨】 本報告では、事前活動の内容およびアンケートとインタビューによる調査の結果を報告する。事前活動自体は単発の勉強会とオリエンテーションであるが、これらの英語研修を通して得られた知見や調査結果はカリキュラム改編に伴う医学英語の授業内容を検討する上で参考になるだろう。

P3-61.

東京医科大学における留学生の受入れの現状と課題　～学内グローバル化を目指して～

（医学教育推進センター）
○永田　　彩
（医学教育推進センター・医学教育学講座）
泉　　美貴

【背景】 現在、本学では、海外の大学・病院7施設と姉妹校・学生交流の契約を調印している。提携校の拡大に伴い、海外からの留学生の受入れ人数が徐々に増えている。
（平成22年度2名、平成23年度4名、平成24年度7名、平成25年度10名）

【目的】 今後、より多くの留学生を受け入れることで、本学が国際化することを目指している。提携校からの留学生と受入れの科の現状を報告すると共に、課題を考察する。

【方法】 提携校からの留学生8名より提出された報告書とこれまで留学生を受け入れた14科を対象としたアンケート調査で現状を確認する。

【結果】

① 提携校からの留学生側－困ったこととして、大学と寮のインターネット環境が不十分であること、時に指導医との英語でのコミュニケーションが困難な場合があることが挙がった。しかし、総合的には、留学生の本学の実習に対する満足度は高かった。

② 留学生の受け入れ科側－留学生を受け入れることで、14科中13科が教室内の国際化の推進、英語のスキルアップ、モチベーションの向上などメリットがあるとみている。また、14科中11科が留学生の受け入れは、特に問題がないとの回答であった。指導者が不足するために留学生の受け入れが難しいと回答した科は1科であった。

【考察】 留学生は全員が本学の実習に満足している